

科学実践のワークの研究黎明期における現象学の寄与 —パルサー論文における現象学の痕跡の検討—

The Contribution of Phenomenology to the Dawn of the Study of Work in Science:
An Examination of Phenomenological Traces in the Pulsar Paper

秋谷 直矩*

AKIYA Naonori

【要旨】 ガーフィンケルらによって書かれた通称パルサー論文は、エスノメソドロジーにおける科学実践のワークの研究の嚆矢であり、STSにおける実験室研究の先駆である。しかし、現象学の用語が多用されるものの、その意味は元から大きく変えられているなど、非常に難解である。以上を踏まえ、本論ではパルサー論文に見られる現象学の影響とその「意図的な誤読」の意味とその背景を明らかにすることを目的とする。そのためにガーフィンケルのゼミの音声記録や公刊資料に残された記述を整理した。結果として、科学のワークを固有の歴史と秩序を有する身体的／非身体的行為のワークの観点から捉えるために現象学の議論や用語をガーフィンケルは「意図的に誤読」して利用したことが明らかになった。

【キーワード】 エスノメソドロジー、現象学、科学のワーク、身体性、レリヴァンス

1. はじめに

2025年6月24日、同僚の川崎勝先生が亡くなった。科学史家で医学教育にも業績を残した川崎先生は、世間的にはブルーノ・ラトゥールの著作の翻訳を通じた日本におけるアクターネットワーク理論の普及に関する仕事が知られている。川崎先生は、学部の展開科目「科学技術社会論」で、英語で書かれた某 STS の教科書を講読文献に採用し、学生用に私訳も準備していた。2020年の1月、同著の実験室研究について書かれた章と標準化と客観性について書かれた章の私訳の確認依頼があった。エスノメソドロジー（以下 EM）研究のひとつである、科学実践のワークの研究に関する記述があったからである¹。いくつかのコメントをメールで返して間もなく、コメントのお礼にと私の研究室まで来た氏は、いつもの長い四方山話を始めた。ラトゥールの著作の翻訳にまつわる産業図書の故江面竹彦氏のエピソードを話しながら、EMの書籍が詰まった書棚を眺めていた氏が、EMがよくわからないという旨のことをふと呟いたのを記憶している。仕事が立て込んでいたこともあり、それに対して筆者は深く立ち入らなかった。いつでも話す機会はあるだろうとも思っていた。

* 山口大学国際総合科学部 akiya@yamaguchi-u.ac.jp

¹ ただし当該書籍で参照されている EM の実験室研究はパルサー論文ではなく、マイケル・リンチの”Scientific Practice and Ordinary Action Ethnomethodology and Social Studies of Science”だった。

STS における実験室研究の先駆は、上述のラトゥールによるものも含めていくつかある。EM の創始者であるハロルド・ガーフィンケルらによって書かれた、初期の科学実践のワークの研究である通称パルサー論文 (Garfinkel, Lynch and Livingston 1981) もそのひとつである。ラトゥールの翻訳者である川崎先生もパルサー論文には触れたことがあるはずだ。もしかしたら、この論文のことも含めての疑問だったのかもしれない。

たしかに、パルサー論文は現象学の用語が意味を変えられて多用されているなど、さまざまな理由で難解である。しかも、その背景は長らく詳らかではなかった。しかし、2021 年以降のガーフィンケルの遺稿や、マイケル・リンチの編集によるゼミナールの音声記録の公刊事業の展開と、それを踏まえた解説論考の出版が盛んになり、状況は変わってきている。

本論では以上の文脈を踏まえ、パルサー論文における現象学からの影響の痕跡を拾い上げ、その意味を明らかにする作業を進める。それにより、ガーフィンケルがどのようにして現象学のアイデアを、科学を対象とした経験的な社会学研究として昇華させたのかを明らかにする。これが、当時何となく流してしまった川崎先生の呟きへの——遅きに失したものではあるが——応答になればと思う。

2. パルサー論文の概要

1981 年に発表されたパルサー論文は、アメリカ物理学会の物理の歴史と哲学センターの所蔵物を主に用いて書かれた²。具体的には、スチュワード天文台でジョン・コックとマイケル・ディズニーらが、1969 年 1 月 16 日に望遠鏡と電子装置を用いて天文観測をするなかでパルサー（脈動星）を発見した瞬間の会話の録音テープの分析を軸に、「発見」をめぐる相互行為の組織を分析したものである。

ガーフィンケルらは問題の核心を、「ラン (Run)」の局所的歴史性だと述べる。「ラン」とは、「アナウンスされた「始まり」からなるエピソード的な構成を持つワークの流れ」(Garfinkel, Lynch and Livingston 1981, 134) を指す。具体的には、望遠鏡と電子装置を通して観察された光信号の周波数を、天文学に関する専門的能力のもとでパルサーの発見と同定するまでの、コックとディズニーの間で繰り返された観測と、再分析可能な証拠を集める状況付けられた具体的なワークである。パルサー論文は、パルサーを説明可能なものとする、主に会話を通じた身体化されたワークのさまざまな特徴を列挙したものである。

この「発見」をめぐる相互行為の局所的歴史性を、コックらが観測結果をまとめた論文とのペアでガーフィンケルらが検討している点は重要である。後者におけるパルサーを、ガーフィンケルらは文字による説明を通して文化的に生成された「独立したガリレオ的パルサー (independent Galilean pulsar: IGP)」³と呼ぶ。

² Garfinkel (2022) に収録された 1980 年のゼミナールの音声記録で自身が述べているように、1975-76 年に彼がスタンフォード大学行動科学研究センターのフェローをしていた際に、科学史家のホルトンとの議論をきっかけに科学実践のワークの研究の端緒を掴んだ。パルサー論文で取り上げられた会話テープの存在をガーフィンケルに教えたのもホルトンである。

³ この用語はフッサールの「ガリレオによる自然の数学化」に関する議論から借用された (Garfinkel, Lynch and

[パルサーの発見をめぐる相互行為の局所的歴史—IGP の局所的歴史] のペアの性質は次のようなものである。まず、前者から後者に至る点で不可分に結びついた一貫した連続的な関係にあると同時に不可逆的である。後者においては、前者の身体化された行為の痕跡は、ガーフィンケルらの言葉を借りれば「その日限り (ephemeral)」のものとして失われ、時間的・空間的要素が希薄なフィクションにおける語り手——Garfinkel らはこれを「超越的分析者」と呼ぶ——の声によって「展示可能な客観性、観察可能な分析可能性および理解可能性」(ibid, 141) を持つ文化的オブジェクトとして構成される。超越的分析者による説明は「テープに記録された声の整然とした秩序の中のどこにも存在しない」(ibid, 138) のである。この超越的分析者の声とは、天文学研究に取り組む自然言語共同体の内部で制度的に確立された用語によって形式的に記述される、ということも意味する。

3. パルサー論文における現象学の痕跡

3-1. 比喩としての「ゲシュタルトのテーマ」

以上の内容について、ガーフィンケルらはパルサー論文の冒頭で以下のようなゲシュタルトのテーマの比喩のもとでその骨子を示している (Garfinkel, Lynch and Livingston 1981, 132)。

[彼らの発見を構成していると我々が考えたもの]の意味をわかりやすくするために、「ゲシュタルトのテーマ」を比喩的に用いることで、彼らの発見を特徴付けることから始める。彼らの発見と科学は、天文学的に「葉の茂みから動物を取り出すこと」から成り立っている。「葉の茂み」とは、彼らの身体化された仕事場の実践の局所的な歴史性である。「動物」とは、適切な方法的手続きとして行われ、認識され、理解される局所的な歴史性である。「動物」は、彼らの身体的に観察可能な天文学的实践を、独立したガリレオ的パルサーの超越的特性として定式化する。

ここで注目したいのは、なぜわざわざゲシュタルトのテーマという比喩が用いられているのか、ということである。ゲシュタルトのテーマという用語をそのまま受け取るならば、「葉の茂み」とはすなわち「地」であり、「動物」とは「囟」のことを指すのであろう。そして、「取り出す」とは「地 (=葉の茂み)」の上に「囟 (=動物)」を見ることであろう。原初的なゲシュタルト心理学の議論を踏まえれば、ガーフィンケルらはもはや個人の「知覚」にとどまらずにゲシュタルトのテーマという用語を用いている点で、明らかな誤用である。この論文にとって不必要にさえ見える比喩は、どのような背景によってなされたのだろうか。パルサー論文自体には、この箇所以外でゲシュタルトという用語は登場しない。したがって、この疑問はパルサー論文のみからは導くことができない。

この疑問を紐解く最初の鍵は、1983 年にパルサー論文の著者らが書いた EM 入門的論考に見ることができる。この論考では、パルサー論文を含む当時の科学実践のワークの研究群の起源に

Livingston 1981, 138)。

モーリス・メルロ＝ポンティの『見えるものと見えないもの』とマルティン・ハイデガーの『物への問い』にあること (Lynch, Livingston and Garfinkel 1983, 230)、そしてアロン・ギュルヴィッチの『意識の領野』におけるゲシュタルト構造に関する議論も併せて参考にしたことは明言されていた (Lynch, Livingston and Garfinkel 1983, 232, 234)⁴。しかし、いずれもごく短い言及にとどまっており、とりわけハイデガーからの影響に関しては、この論考からはほとんど情報をとることができない。

転機となったのは、1992年と1993年のガーフィンケルのゼミ記録 (Garfinkel 2021) と、1980年のゼミの5つの音声記録を含む”Harold Garfinkel: Studies of Work in the Science”の刊行である (Garfinkel 2022)。前者は主にギュルヴィッチからの影響を詳細に説明したものである。後者は、パルサー論文を含む当時の科学実践のワークの研究におけるハイデガー、メルロ＝ポンティ、そしてギュルヴィッチからの影響を、「葉の茂み」と「動物」を用いたゲシュタルト・テーマの比喩の使用に引き付けて説明している場面を部分的に含んでいる。次節以降では、これらの資料における断片的な記述を手がかりに、科学実践のワークの研究の初期のものであるパルサー論文における現象学の痕跡とその創造的な変容のありようを整理する。そうすることで、ゲシュタルト・テーマの比喩の導入の意味が明確になる。

3-2. ハイデガーからの影響：「科学」を資源から主題へ

まず注目したいのは、ガーフィンケル自身がゲシュタルト・テーマの比喩で述べたことについて、1980年のゼミで次のように述べていることである。

さて、これこそが我々をハイデガーの継承者たらしめるものである。なぜなら、もしトークが現象に対する適切性において成り立ち、命題として利用可能であり、その命題がその主語と述語において、対象とその性質としての現象の現前に対応するような仕方で成り立つとすれば、その場合我々は、ガリレオ的科学が我々の手に委ねるような発見のヴァージョンに対して敬意を払い続けることになるだろう。しかしそうではない。そしてトークがトークされた現象を露わにしているという点において、それは、見ることを成り立たせている諸々の実践を介して現象に繋ぎ止められていることを意味する。したがって、見ることはどうしようもなく理性化されているのである。

(Garfinkel 2022, 191)

この箇所につけた注で、編者のリンチは、この時期のガーフィンケルがハイデガーの『物への問い』の英訳版を光学パルサーのマテリアルに関連付けて読んでいたことを付記している。また、別のところで同著とメルロ＝ポンティの『見えるものと見えないもの』に収録された「絡み合い：交叉配列」に起源があると述べている (Lynch et al 1983, 231-2)。このゼミ中のガーフィンケル

⁴ ガーフィンケルらはいずれの著作も原著ではなく、英訳版を参照している。このことから、本論の本文および参考文献のリストにおいてそれぞれの著作に言及する場合は英訳版（と日本語訳）の情報を載せることとする。

の発言が実際に『物への問い』を念頭に置いたものかどうかは明言されていないが、ここでは『物への問い』を念頭においた発言であるという前提で、ガーフィンケルが参照したと思われる同著の箇所を照準を定めて検討を進めたい。

ハイデガーは同著の準備部において、「物とは何であるか、物とはどう見えるのか」という問いについて、「物とは諸性質の担い手である、ということであり、この物に対応する真理が、その座を陳述において、すなわち主語と述語の結合である命題においてもつということである。この答えは——そう言われたように——極めて自然的であり、この答えの根拠づけも全く同様である」(Heidegger 1967=1989, 43)と述べている。「陳述」とは、ハイデガーによれば「H について、a、b であると陳述すること」(Heidegger 1967=1989, 42)を指している。H とは命題の対象 (= 主語) であり、a と b とは命題の対象に帰属する構成要件、すなわち命題の陳述 (= 述語) である。これは「である」といった結合語 (= 繫辞) によって結び付けられる。H に代入されるさまざまな「物」に関して、この命題の真理は、「日常的な理解可能性の圏域」(Heidegger 1967=1989, 44) から自然にもたらされている。ゆえに、ハイデガーはこの問いは「解決済み」だと述べている。彼が問うのは、この「自然的」なものが、どこからもたらされたのか、ということである。

ハイデガーはこれを歴史的な問いとして捉えた。そして、科学の歴史をさかのぼることで、近代科学の特徴である、事実学であること・実験的探究であること・測定科学であること・数学的であることによって導かれた「純粋な理性に基づいて物を規定すること」(Heidegger 1967=1989, 118) が今日のわれわれにとって「自然的」なものになったと整理する。そして、そこから「純粋な理性へといかに至りうるのか、また、至らなければならないのか、を明らかにすること」(Heidegger 1967=1989, 118) という次の課題を導出する。以上の作業を経て、ハイデガーは『純粋理性批判』を解釈する作業に移るのだが、本論の目的に鑑みてここまでの紹介で十分であろう。

パルサー論文に戻ろう。同論文で、コックとディズニーが天文学コミュニティの日常的な理解可能性の圏域において観測装置によって捉えられた周波数をパルサーとして同定していたことが描写されている。問題はそれがハイデガーの説明するとおり、自然的なものかどうか、ということである。ガーフィンケルが目にするのは、彼らの会話において「この周波数はパルサーである」と陳述することはすんなりとなされてはいなかったということである。彼らは観測所のなかの様々な関連するものを見ながら、見え方を確認し・その意味を推察し・懐疑し・同意を得る…といったやり取りを通して発見のワークに取り組んでいた。ゆえに、ガーフィンケルらは「テープを調べてまもなく、私たちは彼らの発見を適切に表現するものとして、ガリレオ的科学的な独立した超越的パルサーを脇に置くことにした」(Garfinkel, Lynch and Livingston 1981, 136)のである。

エトムント・フッサールがまさにそうであったように、ガリレオによる「自然の数学化」から導かれた客観主義の台頭により、人びとの純粋意識の領野、すなわち生活世界を忘却するに至ったという論理が当時の現象学の必要性を支えていた。『物への問い』もこの論理を引き継いでいると言える。この論理において、科学はわれわれの生活世界を基盤に成り立っているにもかかわらず、それを覆い隠すものである。そこでは、現象学の実践においてそれはあくまでも現象学の必要性を説くための資源であって、主題ではない。

これに対して、ガーフィンケルは、現象学が従事すべき課題を明確にするために引き合いに出

された科学もまた現象であるとして探求対象とし、現象学の議論において定式化された科学の特徴を再特定化するという戦略を取った。たとえば、先に示したとおり、ハイデガーの『物への問い』における「陳述」の議論をガーフィンケルは引き合いに、コックとディズニーの実際のやり取りから「陳述」の実践的組織の解明へと向かうのである。ここからガーフィンケルは実際に「陳述」がどのようになされているかを検討するための「方針」を作り上げるために、メルロ＝ポンティの議論を引き合いに出している。次項ではこの点について検討する。

3-3. メルロ＝ポンティからの影響：「物」と「身体」の絡み合い

1975～76年の科学史家のホルトンとの会話を1980年にガーフィンケルが述懐するなかで、彼は非常に興味深いことを述べている。

…さて、私たちの会話の途中で私はホルトンに、彼が私に語ったような研究、そして彼自身の、まさに卓越した研究において興味深い点は、それらの研究が、分析者自身の、そして彼らが研究対象としている科学者の主観性を不可避免的に利用していることだと提起しました。その主観性とは、いわゆる「非身体的な」主観性です。つまり、科学者の実践に関する既存の研究における主観性は、その研究を構成する活動に意図性を付与します…

[略] …分析者の手にあるこの主観性は、身体化された行為のレリヴァンスすべてを免責する機能を持ちつつ、分析者が「確かに科学者のワークの構造を捉えていた」と主張する権利を維持する役割を果たすのです。

(Garfinkel 2022, 110)

このように科学史家が分析に用いる資料の特性について述べたうえで、ガーフィンケルは、メルロ＝ポンティの議論の重要性、すなわち身体化された行為のレリヴァンスに照準した科学実践のワークの研究をホルトンに提案したと述べている。すでに述べたように、リンチら(1983)では、ハイデガーの『物への問い』とメルロ＝ポンティの『見えるものと見えないもの』に収録された「絡み合い：交叉配列」に起源を持つとされる。

「絡み合い：交叉配列」のどの箇所をどのように参照したのかは明示されていない。しかし、科学実践のワークの研究におけるガーフィンケルらの関心や対象を踏まえると、間身体性のアイディアが関わっていると考えられる。たとえば、メルロ＝ポンティは次のように述べている。

…私が他人の感じているそれら [=色や感情的起伏] についての観念や心像や表象ではなく、いわばそれらに迫るような経験をもつためには、私は風景に目を向け、それについて誰かと話すだけで十分である。彼の身体と私の身体の調和的操作によって、私が見ているものが彼のうちに移行し、私の眼下の牧草地のこの個性的な緑が私の視覚を離れることなしに彼の視覚に侵入し… [略] …私は私の緑のうちに彼の緑を認めるからである。

(Merleau-Ponty 1968=1989, 198)

こうした記述に、経験とは特定の方法によって「観察可能で報告可能な現象」であるとする EM の基本的な論点との部分的な重なりを見出すことができるだろう。かつてガーフィンケルは、メルロ＝ポンティの「現象野」の議論を意図的に誤読することで EM のスローガンを導くことができると述べていたが (Garfinkel 2002)、それと同じことを述べているとみなすことができる。

つまり、「見る」という行為は、メルロ＝ポンティに倣うならば、相互行為における行為者間の間身体的な交叉において何をどのようにみているかが共有されるものなのである。科学実践のワークにもそれは敷衍することができる。「見る」ことを含む様々な科学実践のワークが観察可能で報告可能なやり方によって組織されていなければ、パルサーを同定するコックとディズニーの相互行為は成立しない。「[発見] は、見ることを成り立たせている諸々の実践を介して現象に繋ぎ止められていることを意味する。したがって、「見ることはどうしようもなく理性化されている」 (Garfinkel 2022, 191) のである。

3-4. 科学（文化）による知覚の主題化というテーゼ

さて、Garfinkel (2022) では、一箇所だけ明確にメルロ＝ポンティの『知覚の現象学』に言及している箇所がある。パルサー論文において定式化した「超越的分析者」の特徴について説明するなかで、ガーフィンケルは次のように述べている。

…第三の特徴は、メルロ＝ポンティ [1958: 6-7] が手がけた曖昧な行為の哲学、あるいは身体化された行為の哲学にある特徴です。彼は世界の「偏見」について語り、これによって、世界の対象物がそれらについて語られ、発見され、見られうるすべてのことの唯一の権威ある源泉であり原因であるとみなされることを意味しています。これはまた、世界の存在に関する自然的理論的見解の別のバージョンとしても語られるべきです… [略] …

すでに指摘したように、私たちは「代わり」として、非身体的主観性の実践を有しています。したがって、超越的分析者のさらなる特徴… [略] …については、その代わりにハイデガー的な真実と検証可能性のヴァージョンが存在するのです。

(Garfinkel 2022, 160-1)

ここでの「偏見 (prejudice)」とは、「感覚作用に関するいわゆる明証性は、意識の証言に基づいているのではなく、世界についての先入観に基づいているのである」(Merleau-Ponty 1958=2009, 31) という箇所を踏まえている。メルロ＝ポンティは、科学（文化）的知覚との対照で「野生の知覚」(Merleau-Ponty 1968=1989, 305-7)、すなわち生活世界の存在とそれに向かうべきであるという現象学の方針を主張している。しかし、ガーフィンケルは、現象学的な「科学（文化）的知覚と野生の知覚」の対立図式を受け入れていない。ガーフィンケルにとって、科学（文化）的知覚、すなわち超越的分析者による実践によって覆い隠されているのは、科学をするメンバーの身体的なワークなのである。以上を踏まえ、ガーフィンケルの「方法」を以下にまとめる。

1. 現象学の問題定式における「科学による世界の把握の仕方」を、それによって生活世界が忘

却されたことを述べるための資源ではなく、それ自体を主題に据えよ。

2. ハイデガーの陳述とメルロ＝ポンティの間身体的交叉の議論を手がかりに、科学の発見のワークにおける身体的実践に関心を向けよ。
3. 現象学者によって定式化された「科学による世界の把握の仕方」は、実践的には論文や報告書によってまとめられた IGP に相当するものとして捉え直せ。併せて、それ自体が固有の歴史性と秩序をもったものであることに留意せよ。

以上は、ガーフィンケルによるギュルヴィッチの議論の取り入れ方を整理することによって、より具体的になる。そして、冒頭で述べた、パルサー論文におけるゲシュタルトのテーマの比喩導入の背景とその意味の解明にたどりつくことができる。最後にこの点について検討する。

4. おわりに： パルサー論文の冒頭における「ゲシュタルトのテーマ」の比喩の導入の意味
パルサー論文において、「独立したガリレオ的パルサー」の特性についてまとめた箇所に、次のような記述がある。

脱身体化された主観性の実践において、彼ら [コックとディズニー] の議論は、あらゆる問題—適切な知識と適切な事実、レリヴァンス、方法、動機—に関して、身体化された行為のイレリヴァンスを保証する機能を持つ主観性を用いている。それは、そのイレリヴァンスを証明するための根拠を提供することによって実現される。

(Garfinkel, Lynch and Livingston 1981, 139)

この記述は、コックとディズニーが捉えた光信号をパルサーの発見であると同定するまでに実際にやっていたさまざまなワークにおいてレリヴァントだった身体化された行為が、論文においてはイレリヴァントになっていることを述べたものである。このような行為者の身体性に結び付けられたレリヴァンス/イレリヴァンス概念の用法は、何に由来するのだろうか。

リンチらは、科学実験の準備場面の観察を通して、作業台に実験に必要な器具を配置するワークにおいてレリヴァントな器具とそうでない器具が、「測定」や「化学薬品の加熱」のために配置が操作されることに着目した (Lynch et al 1983)。そこでリンチらは、「測定」や「化学薬品の加熱」というワークを、Gurwitsch (1964) で示された、ゲシュタルトの文脈構造がレリヴァンスの集合体であるという考え方のもとで理解されるべきだと述べている (Lynch, Livingston and Garfinkel 1983, 234)。また、すでに言及したように、ガーフィンケルは、科学史家のホルトンとの対話において、科学史家の仕事が脱身体化された科学者の主観性 (文字化された歴史資料のこと) を利用していることに対してコメントしたうえで、メルロ＝ポンティを引き合いに出して、「身体化された実践の示されたレリヴァンス」を検討する方法について話した。

この 2 つの記述は相補的なものとして見るべきである。Gurwitsch (1964) の議論は、行為者の行為の主題に対して、その状況にある道具や他人がどのようにレリヴァント/イレリヴァントになるのかという点に注目している。もっともそれは一般的な指摘にとどまり、「ギュルヴィッチ

は社会そのものを本来あるべきほどに広く分析していない」(Embree 2004, 215) ものであった。したがって、ギルヴィッチの現象学的なアイデアから出発して社会そのものを分析するためのアイデアが別途必要となる。そこでガーフィンケルによってメルロ＝ポンティの間身体性の議論が参照されたということであろう。なお、パルサー論文では主観性という言葉が多用されているが、あくまでもそれは間主観的な意味で用いられていることには留意が必要である。これが、ガーフィンケルらの取り組みが現象学ではなく、それにインスパイアされた社会学であることの証左である。パルサー論文では「彼らの局所的な、相互行為的に生み出され、認識され、理解され、具現化された実践として構成されているものを特定する必要がある」(Garfinkel, Lynch and Livingston 1981, 135) とその方針についてガーフィンケルらは述べていることに留意すべきである。これが、ガーフィンケルが繰り返し述べていたハイデガー、ギルヴィッチ、メルロ＝ポンティを「意図的に誤読せよ」(Garfinkel 1996, 2021) という勧告の要点である。

以上を踏まえると、パルサー論文の冒頭におけるゲシュタルトのテーマの比喩の導入の意味が明らかになる。ガーフィンケルらは、ゲシュタルトのテーマの比喩を用いることによって、コックとディズニーが実際に行っていたワークをどのように捉えるべきか、ということを示唆していたのである。ゲシュタルトとは、ひとまとまりの活動、すなわち「ラン」である。それらがひとまとまりの活動として理解でき、かつそれとして組織できているならば、そこでは特定の身体的行為や事物が何らかのやり方でレリヴァントなものとなっている。そこには、パルサーを特定するための試行錯誤や失敗も含まれる。こうしたさまざまな「ラン」にレリヴァントな身振り、会話、道具の使用が「葉の茂み」である⁵。このようなワークを経て、パルサーが同定される。これが「動物」である。重要なことは、「動物を取り出すこと」と慎重に書かれていることである。その意味は、パルサーの抽出は、同時に「方法的手続きとして定式化可能な実践を抽出するもの」(Garfinkel 2022, 119) でもある、ということである。それは最終的に IGP を抽出するための理論として、「ラン」におけるさまざまな身体的行為のレリヴァンスを失った形式で論文に記載される。パルサー論文冒頭のゲシュタルトテーマの比喩は、こうした一連の科学実践のワークを表現したものなのである。

【謝辞】

本研究は JSPS 科研費 21K01901 の助成を受けたものです。

.....

【参考文献】

Embree, Lester. 2004. "The Three Species of Relevancy in Gurwitsch." In *Gurwitsch's Relevancy for Cognitive Science*, edited by Lester Embree, 205-219. Dordrecht: Springer.

⁵ このような行為に満ちた空間について、Garfinkel は別のところで「プレナム」と表現したことを思い起こすべきである。「葉の茂み」の比喩は、「プレナム」と同じ意味だと考えられる。

- Garfinkel, Harold. 1996. "Ethnomethodology's Program." *Social Psychology Quarterly* 59, no. 1: 5-21.
- Garfinkel, Harold. 2002. *Ethnomethodology's Program: Working Out Durkheim's Aphorism*. Lanham: Rowman & Littlefield.
- Garfinkel, Harold. 2021. "Ethnomethodological Misreading of Aron Gurwitsch on the Phenomenal Field." *Human Studies* 44, no. 1: 19-42.
- Garfinkel, Harold. 2022. *Harold Garfinkel: Studies of Work in the Sciences*. New York: Routledge.
- Garfinkel, Harold, Michael Lynch, and Eric Livingston. 1981. "The Work of a Discovering Science Construed with Materials from the Optically Discovered Pulsar." *Philosophy of the Social Sciences* 11, no. 2: 131-158.
- Gurwitsch, Aron. 2010. *The Collected Works of Aron Gurwitsch (1901-1973): Volume III*. Edited by Richard M. Zaner and Lester Embree. Dordrecht: Springer. Originally published in 1964.
- Heidegger, Martin. 1967. *What Is a Thing?* Translated by W. B. Barton Jr. and Vera Deutsch. South Bend: Gateway Editions. (=1989, 高山守・クラウス・オピリーク訳『ハイデッガー全集 [第41巻] 物への問い：カントの超越論的原則論に向けて 第2部門講義 (1919-44)』東京大学出版会.)
- Lynch, Michael, and Clemens Eisenmann. 2022. "Transposing Gestalt Phenomena from Visual Fields to Practical and Interactional Work: Garfinkel's and Sacks' Social Praxeology." *Philosophia Scientiæ* 26, no. 3: 95-122.
- Lynch, Michael, Eric Livingston, and Harold Garfinkel. 1983. "Temporal Order in Laboratory Work." In *Science Observed: Perspectives on the Social Study of Science*, edited by Karin D. Knorr-Cetina and Michael Mulkay, 205-238. London: Sage.
- Merleau-Ponty, Maurice. 1958. *Phenomenology of Perception*. Translated by Colin Smith. London: Routledge and Kegan Paul. (=2009, 中島盛夫訳『知覚の現象学〈新装版〉』法政大学出版社.)
- Merleau-Ponty, Maurice. 1968. *The Visible and the Invisible, Followed by Working Notes*. Translated by Alphonso Lingis. Evanston: Northwestern University Press. (=1989, 滝浦静雄・木田元訳『見えるものと見えないもの 付・研究ノート』みすず書房.)

.....